

〈地域構想フォーラム〉

私と「地域」とのおつきあい

梅屋 潔¹⁾

I.

文化人類学を専攻する私が地域とのかかわりについて何がしかのことを述べるとすれば、それは第一義的にフィールド（調査地）とのかかわり、おつきあいについて述べることであり、それにほとんど尽きると思われる。

私はこれまで呪いや崇りをキーワードに文化を読み解く試みをしてきた。こう書くとひどく好事家的な研究をしてきたように思われるかもしれない。しかし、ある意味ではそれは的を射ていない。呪いや崇りなど、暗い概念の背後にはその地域に暮らす人々の深い苦しみや悩みが集約している。別の言い方をすれば、呪いや崇りの観念があるときは表面的には衰えるように見えながら、姿を変えて生き残るのは、人間が多く解決不能な問題に取り囲まれて、それでも、インスタントに解答を求め存在であることによっているのではないかという一応の見通しを持っている。

呪いや崇りに限らず、こうした社会の内奥部に踏み込もうとするとき、誤解にもとづくものにせよ、一度は必ず地域の人の一部と紛争状態（どのような形であれ、また程度の違いはあれ）を経験する、というのが私の経験則である。しかしながらそれはあるときは時間をかけて、あるいはあるときは可能な手続きを模索しながら、真摯に対応すれば、以前よりもより良好な信頼関係が生まれるきっかけとなることもまた経験則としてある。今日は具体的な事例としてそれらを紹介する。ただ、この作業は一時的にであれ、かなりしんどいことであることは確かなので、実習などの教育活動のなかでどの程度学生諸君に見せたり（あるいは見せないか）、体験させるのか（あるいはさせないか）は今後の課題として残っている。

II.

私は、はじめから呪いばかりを追っていたのではない。私は1990年ごろから、当時所属していたゼミ

や民俗学サークルの合宿などで、各地を見て回った。当時すでに文化人類学で身を立てる決意をひそかにしていたので、正規の合宿よりも早く現地に行き話を聞いたり、別な機会に合宿で訪れた場所を訪れたりしていた²⁾。

そのうちもっとも地域の人々と深く交流したのは和歌山の古座だった。古座には、7年間通い、2001年にも行って来た。翌年には、正月の大漁祈願に京都に漁協の代表たちが行った帰りに大阪に寄ってくれた。

古座の祭りは、オキット（沖の人）と呼ばれる漁師と、オカド（陸人）と呼ばれるおもに水産加工業などを生業とする人々とがそれぞれ別の青年団をもち、それぞれが同じ祭りで別の機能をもっているという興味深い祭りだった。オキット側の青年団である「勇進会」は祭祀組織としては神の船と当屋船をつかさどり、祭りの厳粛な側面を象徴するが、オカド側の「青年会」は祭りだから「チョウケル」（ふざける）ものだとして獅子舞をまわしながら酒をあおる。両者は、ともに同じ祭りをを行い、表面的にはオカドたちはオキットを立ててはいるが、両者には緊張関係が絶えずある。何年前か前に、獅子舞の際、調子に乗って漁師方の青年団の詰め所となっている会館の注連縄を切った事件があり、怒った漁師（酒飲みであるオカドを馬鹿にしている人もいる）が獅子頭を窓の外へ投げ捨てて破壊するという事件もあったそうだ。

あるとき、大変なトラブルがあった。私たち（もう一人の引率者は現在国立歴史民俗博物館研究部准教授の山田慎也氏³⁾が連れて行った後輩（女性）が、あまりに「チョウケル」オカドを見かねて、怒鳴りつけたというのだ。保守的な漁村で、しかも自分たちが取り仕切る祭りの期間に、年下の女性に怒鳴られる、ということは、彼らにとって耐え難いことだったことは容易に想像できる。

そのとき私はオキットのほうの詰め所の勇進会館にいて知らなかったが、連絡がありあわてて宿舎に戻った。オカド側の青年会会長が怒り心頭で待っていた。私たちは、まず怒らせたことを引率者として謝罪し、経緯を説明することを後輩に求めた。ところが、怖いのか、後輩は黙ったままだ。30分ほどたつたろうか、埒が明かないと見てとった会長はオ

カドの詰め所の青年会館に引き上げた。祭りは今も進行中だ。いつまでも責任者が青年会館を留守にしているわけにはいかなかったのだ。

次の日、私はオキット側の長老と、勇進会会長に相談した。当時の会長はまだ若手で（といっても40後半）血気盛んだったから「なあにい！」と青年会館に怒鳴り込みそうな気配である。

冷静な長老の助言で、私たちは祭りの後に謝罪することにした。祭りの最中はこじれた際に祭祀の執行に瑕疵があるとまずい、というのが、長老の判断だった。謝罪し（気まずかったが）、「毎年来るが何も書いたものを持ってきていない」という会長の言葉ではっとした。我々が来る以前にも慶應義塾大学のゼミがたびたびゼミ合宿で古座を訪れていた事実を思い出したのだ。実際には、その2年前まで毎年実習で当地を訪れていた慶應義塾大学のゼミとは別のグループなのだが、向こうから見れば同じ「慶應」、こちらの対応の甘さを反省した。前年の参加者を含めて、あわてて報告書もどきの冊子をつくり、数ヵ月後に持っていった。現在では彼らとの関係は良好で、山田慎也氏は修士論文も博士論文も古座の葬式を題材に書いた。

もうひとつのトラブルは、全くの行き違いから起きた。漁師方の勇進会からヒアリングの際教育委員会に、船の漕ぎ手の不足が訴えられた。これを教育長は何を取り違えたのか、「慶應の連中がいる」と考え、正式にわれわれを招いたのだ（もちろんわれわれに櫓が漕げるわけではない）。宿泊施設として消防会館が開放され、布団も借りてくれた、のはありがたかったのだが、夏の古座は暑い。消防会館には風呂はないのだ。歩いて20分ほどのところに銭湯があるが、祭りの準備、祭りの次第を追ってそれぞれの祭祀組織に張りついているうち、銭湯は閉まってしまう。前年まで泊っていたアット・ホームな宿「神保館」のおかみさんの好意で、もらい湯に行ったりしたこともあった。青年会にしても勇進会にしても、なぜ消防会館にわれわれが住みついているのか不可解だったらしく、若干不穏な空気が流れた。これも根気よく説明することで難を逃れた。

Ⅲ.

同じころ、新潟県佐渡市ですこし本格的な調査を

することになった⁴⁾。調査といっても今思えばカメラは「写るんです」しか持っていなかったし、資金は乏しかったから、テープレコーダを使い始めたのは比較的后になってからだった。今にして思えば、これはよかったと思っている。佐渡の老婆のなかには、名刺を出すやと警戒して丁寧にインタビューを断られたりして、最初からテープレコーダを持ち出したら、どんなことになっていたかわからない。（後に行ったウガンダ村落でも女性はなかなかインタビューに答えてくれなかった。下手なことを言うと、夫に殴られるからだそうだ。船橋では、逆に名刺が威力を発揮した。祭りだったから、男性にしか話を聞かなかったような記憶もある。地域はいろいろだし、ジェンダーによる反応の違いもあるから、なにげない生活を観察するには様子見が肝心であることを学んだ）。

最初は呪いや化かされた事例を集めているだけだったが、それではなかなか社会についての分析が立体化しない。基本に立ち返って親族組織を調べ始めて、急になにか「わかった」ような気がした。この社会での呪いは、アシフミ婚によって社会の隙間に落ち込んでいる妻のうちのとりわけ後妻が、先妻の子が生存していることによって血縁による身分保障が揺らいでいることによるあえぎのようなものだ、という分析を試してみた。それが梅屋 [1994b, 1995a] である。現在でも首尾一貫しているという点では、これよりも自ら納得のいくものは書けていない。

このフィールドワークの最中にも、ちょっとした事件があった。ある後妻がムジナの力を使って先妻の子を呪い殺した、という話を聞き、録音していたことである。その息子さん（仮にSさんとする）が部屋に入ってきて、「この話は公になったら困るんですよ、ばあも、名前を出さずに、あのもんが、とかいう言い方をせんなん」といった。私は、一瞬たじろいだが、仮名や記号なら公表してもいいという許可をなんとかとりつけた。はじめ論文として、のちに共著書として出版し⁵⁾、教育委員会、郷土史家、そして苦言を呈した人にも、お世話になった人たち全員に送った。

そののち、見学に行った後輩の話では、話を聞こうとすると私の書いた印刷物を出して、「これにみ

んな (!) 書いてある」といわれることが多かったという。その話を聞いてほっとした。1999年に再訪した際には、Sさんを除き、話を聞いたほとんどの方は亡くなっていた。Sさんとは、現在に至るまで年賀状のやり取りが続いている。教育委員会でも重要な資料として大切にしてくださっていると聞く。郷土史家の主宰する『郷土研究佐渡』誌にも寄稿を依頼されるという光栄に浴したが、迂闊にもながらくそのままになっている。

IV.

呪いや祟りの概念—つまり不幸や死をどのように説明するかという文化的装置にその地域の悩みが集約しているというビジョンを持つようになった私は、エヴァンズ=プリチャードの名著以来⁶⁾、人類学でその研究の古典が集中しているアフリカの本格的調査を開始しようとその道の権威のいる一橋大学博士課程に進学した。幸い日本学術振興会の特別研究員に採用されたので、ウガンダでの現地調査を開始することができた⁷⁾。

1997年から始めたウガンダでの調査は、初手から調査許可取得に苦勞した。ウガンダでは、ウガンダ国内の研究機関に在籍し、ウガンダ国科学技術評議会 (Uganda National Council for Sciences and Technology) の調査許可をとり、紹介の手紙を書いてもらい、最後に大統領執務室の了解をとりつけないと正式な許可は下りない。

「多くの場合、帰国するころ正式な許可が下りる…」とはあとで聞いた話。そのときは「1週間」というマケレレ社会調査研究所の秘書官の言葉を信じて1週間後から約2週間、毎日通った。ところが、まだ、まだ、まだ…。ある時、マケレレの丘のふもとにあるワンデゲヤという下町で昼食後のビールを飲んでいて、日の高いうちからジンを飲んでべろべろになっている紳士がいる。きれいに折り目の入ったカウダ・スーツを着た紳士曰く「中国人か?」「いや日本人」「なぜ日本人がこんなところにいる?」私はウガンダ東部のアドラ民族の村に住み込んで調査をしたいこと、調査許可を待っていること、もう3週間にもなるのに何の進展もないので困っていることなどを話した。すると彼は、ポケットから氏名と私書箱の彫られたスタンプを取り出す

と、私が文献カードに使っていたカードにぼん、と押しした。Professor Walumbe (MBChB,MD,FRC…), Mulago Hospital…名門ムラゴ病院の教授だったのだ。「ムラゴのオウオリ教授を訪ねなさい。彼はその地域の出身だから」と彼は言った⁸⁾。

何回か空振りした後に、私はマケレレの丘の、副学長 (Vice Chancellor) 公邸 (当時学長は大統領と決まっていたので副学長がアカデミズム側のトップだった) の隣の古い建物 (旧副学長公邸だと後に知った) にオウオリ教授を訪ねた。話はとんとん拍子に進み、木曜日に教授夫妻とともにトロロ県グワラグワラ村に向かうことが決まった。なにやら施設を持っており (後に現地NGOと判明) しかし、私はまだ不安だった。調査許可あるいは紹介状なしでは、逮捕されても文句は言えない。そう教授に告げると、教授は笑って「心配要らない」といった。

二日後、突如として調査許可が下りた。オウオリ教授はウガンダ国科学技術評議会の副議長だったのだ。良くも悪くも人脈社会であることを思い知らされた一件だった。

村に着くと、レンガ造りの建物のなかから、着飾ったひとびとが歓声をあげながら飛び出して出迎えてくれた。そこにはTOCIDAという名前の現地NGOがあり、有機農法とアダルト・リタラシー、そして演劇による衛生やエイズ対策などの知識の普及を目指していた。教授の妻はその現地NGOの創立者にして議長だった。

それから、私は1999年まで、途中病気と事務処理のための一時帰国を挟んで、その村にいた。しかし、依然として機材は質素なものだった。簡単な写真機を持っていることがわかると、撮影しろ、と行って盛装して現れる人も後を絶たず、録音用のウォークマンをラジカセ代わりに借りに来る若者が引きもきらなかった。二個持っていたウォークマンのうちの一つはこうして壊れ (借りた若者が壊れたウォークマンを平然と返しに来た。こういったケースでは彼らはまず謝らない。いや、私は未だにジョパドラン、いや東アフリカで出会った人々がI am sorryと言うのを聞いたことがない)、首都のマーケットでソニー (Sony) ならぬサニー (Suny) といういかがわしい偽の中国製ウォークマンを貸し出し用に購入した。

さて呪いよりも祟りよりも、具体的な死と病の現実のほうがよほど目に見えて頻繁だし、劇的だった。2週間に一度は村の誰かが死ぬ。ほとんどは、エイズである。ケニアから巡回診察に来ていた外務省の医務官は、私の話を聞き、「そんな率ではやがてその村は滅びてしまう」といった。

ウガンダは、その感染率をひた隠しにする東アフリカ諸国のなかでは例外的にエイズ患者の推計数を早くから公開し、その撲滅につとめてきた⁹⁾。都市のエリートに関してはそれなりに成功をおさめている。しかし、村落の撲滅についてはお手上げ、というのが正直なところだ。村で死人が出ても医師の診断などはない。厳密な意味で医学的な診断を受けているのは、病院に行けるもの、つまり超のつく金持ちに限られる。したがって村でのHIVキャリアの比率を示すデータなど、誰も持つてはいないのである。

エイズ予防の知識を普及しようとするある村の若者と話していて、はたと気付いた。長老が政治的権力および儀礼的権威をもつこの地域で、長老の前でセックスの話をするのはタブーである。したがって長老にエイズ予防にコンドームを使え、などとは、若輩者は口が裂けてもいえない。しかも、かりに長老自身がコンドームを使おうと思ったところで一体誰がコンドームを入手すればいいというのか。いやしくも長老は自分で買い物をしたりはしない。たいがい子供にさせるのだが、子供に「コンドーム」を買って来い、などとは長老は言えない。自らの性行為をほのめかすことになるからだ。また若者が買ってきて渡したりしても、この上もない失礼に当たるのだ。

このような解決不能な価値観や社会規範の絡み合いも、フィールドワークの副産物で気づいたものである。

V.

人が死ぬと太鼓の音が鳴り、ヒーッ、ヒーッと叫び声が聞こえる。一体何回の葬式に出たのか、数え切れないほどだ。朝と夜に、女たちはバナナの葉でつくった衣類を着て遺体の寝かされた小屋の外で踊る。杖やパンガ（草を刈る長い刃物）を振りかざし威嚇するようなそぶりを見せるものもいる。

ある日のこと、いつものように何度目かの葬式に参列していた。儀礼がなかば間で過ぎたころ、私は奇妙なことに気づいた。現地語が良くわからない時期だったので理解に時間を要したが、どうも「カメラをもってこい」としきりに言っているようなのである。私は参列のため不謹慎にならないよう、あえてカメラは置いてきたのだが。

カメラを持って帰ると、男たちは私を小屋の中に招き入れた。遺体の前で「撮れ」とジェスチャーをする。すると、それまで蠅にたかられないように顔の前を布であおっていた娘が、ふっと体をひらき、私に道を明けた。言われるままに私はシャッターを切った。それが初めての遺体撮影だった。数週間後、遺族が写真を取りに来た。それ以来私は、葬式には必ず呼ばれるようになった。デスマスクを残すという習慣が西洋にあるところを見ると、これもさして驚くにあたらないのかもしれない。それから数え切れない遺体を撮影した。帰国後、噂を聞いた葬儀屋さんの業界誌から遺体の写真の掲載を前提とした原稿執筆依頼があった¹⁰⁾。

エイズ以外にもさまざまな病気を見だし、マラリアなどは何度も体験した（43度から44度ほど熱が出た。脳も含むたんぱく質は凝固寸前だったろうと思う）。誰かが、「アフリカでは、病名がつくうちはまだまし」といったがその通りだと思う。一度は知己の中年男が私の前で体中の穴という穴から血を噴出してそのまま死んだこともある。

1999年3月、私の日本学術振興会特別研究員としての資格は自動的に失効した。前年末、N教授から誘いがあり、N教授のJICAのプロジェクトについて説明を受けた。「ウガンダ農村社会における貧困撲滅戦略の構築と農村の総合的発展に係る研究協力」というものだった。1月から2月の半ばまで、乞われてカタクウィ県というところでN教授の私設助手をつとめた。今思えば、これは、プロジェクト・リーダーとしてのN教授の採用試験だったようである。

このカタクウィでの経験は忘れられないものである。アドラ民族と違い、人懐こく、行動的でおどろくほど、もうほとんどわがままといっているほど自信に溢れた彼らのパーソナリティは、今思い出しても笑ってしまう。N教授が町にランドクルーザーで買い物に行く（運転手つきである）。N教授がどん

な計画を立てていても決してその通りには行かない。出発が近づくと、教授には挨拶もなく、定員精一杯の人がすでに車に乗っている。教授が途中で人をひろおうと計画していても、そんなことは彼らの関心外である。

打ち続く内戦で故郷を失った人たちの国内難民のキャンプだった。どんどん敷地はブッシュの中に広がり、孤独な単身の住む小屋が乱立する。お互いの不信感からか、妖術（意図しない呪い）、邪術（意図的な呪い）の告発が、村の裁判に絶えず申し立てられる。折に触れ内戦の激しかったころの話の聞くと、ひどいものだった。私はここでは、街での卸売り価格と村での小売価格の差額、それぞれの店の品揃えなどを村の全ての商店（キオスク）を対象に調査した。現地のかやぶきの小屋に住んだが、過ごしやすさはグワラグワラのレンガの家より数段上だった。

週に一度、日曜日にはソロチの町からトラックが何十台もやってきた。村のはずれに市場が立つのだ。それぞれ入札（のようなもの）でとりしきる業者がいて、あらゆる品物が並ぶ。ちょうど乾季だったから隣の牧畜民カリモジョンも来ていて、独特の雰囲気醸し出していた。カリモジョンは乾季にはこの地で牛に牧草と水を与え、自分たちのホームランドでもそれが可能な雨季になると、牛と、時には女を、さらっていくのである。カラシニコフを持っており、写真を撮ったら何をされるかもしれないのでやめた（事実、カラモジャ地方でも当地でも殺された人が何人もいる。都市やそれに近い村落のひとびとは対照的に、東アフリカ牧畜民は一般に写真を撮られると激怒する）。

ある夜、小屋から出ると国軍の装甲車と数十名の軍人が休憩していた。怖いもの知らずで話を聞きに行くが当然「機密」。翌日、村の長老は、カラモジャとの境界の治安維持に行くのだろうといていた。

教授は、牛をつがいで用意し、牛耕用とさらに子牛を生ませて増やすことでこの地域の状況を改善し、プロジェクト援助の鍵と考えているようであったが、JICA上層部には理解されなかった。「牛」というのが、文化人類学を知らない経済学出身の上層部には突飛過ぎたようだった。ただ、教授も、牛プロジェクトが受け入れられても、カリモジョン問題

（つまり治安）が解決しないことにはこの地域の発展はむずかしいと考えていた（なんとその翌年、政府はカラモジャを空爆。多くのカリモジョンが犠牲になった）。

さて、1999年9月に研修を終えて専門家として着任した。私は、ウガンダ中央部の旧ガンダ地区のムピジMpigi県の担当だった。常識的にはそこにすんでいるのはガンダ人であるはずだった。私はガンダ語は挨拶くらいしかできないから、通訳兼助手に仕事を手伝ってもらった（というより彼らにやってもらった）。このあたりから、私の欲求不満は募り始める。

人類学は現地語主義である。得手、不得手はあっても、初めに現地語を勉強する期間は肯定的に確保できる。ここではそれは無理である。また、いろいろな行事があって首都に呼び寄せられたり、さまざまな外務省関係の視察についてまわることを要請される（アテンドという）。

それにもうひとつ、開発プロジェクトをここで行ううえで非常に難しい問題が発覚した。助手が兼ねてから「彼はガンダ語が下手だ」とつぶやくのを聞いておやっと思っていたのだが、ガンダ人の村、と思っていたのは間違いで、選択した村の総人口（うち人頭税を払っているのは10%）のうち80%は、ルアンダ、ブルンディ、コンゴなどからの難民だったのである。コーヒー・プランテーションが良かった時代（1970年代ごろまで）に出稼ぎに来て、賃金の代わりに小さな土地と、小屋と、鶏をもらって住み着いた家族がいる。また、ルワンダ・ブルンディの内戦やコンゴ動乱で国外逃亡した難民がいる。

確かにムセヴェニ大統領は憲法改正し、1995年から、難民も市民と同等の権利を享受できるように法改正していた。しかし、こういった周辺地域ではそういったことが浸透するのは、ずっと先、あるいは、ないまま別の政権が誕生するかもしれないのだ。

事実、難民たちは憲法改正も知らなかったし、知ってもひどく否定的だった。「富めるものが貧しいものにその格差を快く是正するように動くことはない」と雨漏りのするあずまやに住むある人は言った。確かに、相対的に富める人でも、まだおおきな不満を抱えているうちは、それは全くその通りなのだろう。いずれにせよ、間違いのない受益者が20%とい

うのは、巨大プロジェクトを立ち上げるには、状況が悪すぎた。

このようなことを考えると「植民地主義」の歴史は打ち消しがたいものとして俄然重みを帯びてくる。ウガンダは、少なくとも、貨幣や植民地化された都市、あるいは近代的紛争さえなければ、飢え死にすることはない土地である。彼らが苦しんでいるのはいずれも植民地時代の、つまり近代の産物、税金と学校の費用、そしてそれを得るために綿花やコーヒーなど換金作物に圧迫される自分たちの食料を育てる畑の現状なのである。

とはいえ、時間を巻き戻すことはできない。われわれはその時代の地域としかつきあえない。そこでできることは、開発援助というだけでいいことをしているかのような認識をもつのではなく、近代へ、われわれも巻きこまれ、あるときは他者を巻き込んだという歴史認識を踏まえて、対象の地域を真摯にみつめ、それらが主体的に構築されてゆくありようを見据えることだと思う。何かができるとすれば、それらの様態を解きほぐしてからではあるまいか…。そんなことで悩んでいたら、神経を病んで病気で早期帰国する羽目となった。

VI.

幸い、帰国してすぐに応募した笹川科学助成金が得られることになり、またウガンダへ赴くことができた。その調査では、私は新しい問題に取り組み始めた。実は無知で知らなかったのだが、アドラ民族のことで唯一とも言えるアドラ民族の民族誌を書いた人物は、アミン政権の大臣だったというのだ。しかも、彼は、アミンに殺害された、というのがもっぱらの噂である。この計画には、近隣の人びともことのほか好意的である。そこで、彼の事跡を調べると同時に、病の 카테고리や、呪いの観念について調査する日々が始まった。こうした問題を扱うと、広域の調査もせざるを得なくなる。高くついたが車で移動し調査すると、見えてくる地域差がたくさんあった。とりわけ、国連の代表や、ウガンダ・ルアンダ・ブルンディ・ザイルの大主教までつとめた人物が引退して洋服屋さんや自分の経営するレストランの前でぼーっと座っているという事実は、私を驚かせた。

あるとき、インターネット・カフェの電話回線が不調で、新聞の支局に電話線を借りに行った。インターネット・カフェの店主のすすめである。そこで、ウガンダなまりではない英語をしゃべる青年（といっても私より3つほど上だが）に出会った。なんと彼は私の調べている大臣の息子ゴドフリーだった。1996年に亡命先のアメリカから戻ってきたという。彼に、計画を話し、了承を得た。ここまでは順風満帆だった。表に出なかったアミンの片腕、アドラ民族の悲劇のヒーロー、私はこうした物語が通用すると思っていた。

誤算だった。調査を進めるにつれ、その大臣の闇の面が可視化されてくるようになったのである。ここで詳述は控える。死んだ大臣の義理の兄に当たる人物が亡くなったとき、人づてに私に手紙が届けられた。私は動揺してしまった。故人には、昨年調べたことを簡単にまとめたアブストラクトのコピーを郵送してあった。それを見た大臣の実弟が激怒しているのだ。

内容はどうあれ、他人の気持ちを損ねる、というのは残念なことだ。私はウガンダ風に白い鶏を持ってマケレレ大学のアドラ民族出身の旧知の講師と挨拶に行き、事なきを得た。白い鶏は和解のしるしである。その和解の過程で、家族会議等の場でゴドフリーは、大臣の正統後継者として、一貫して私の味方をしてくれたことを知った。現在では彼とは「フェースブック」上の「お友達」である。

また、さらにラッキーなことに、その故大臣の弟は、いまや私の大家のオウオリ教授の学生だったことがあった。もちろん、オウオリ教授は、うまくとりなしてくれていた。

ゴドフリーは、亡き大臣の日記、アルバム、16ミリフィルムなどの遺品を貸し出してくれた。それらをデジタル処理して遺族に返すのが近年の重要な仕事である¹¹⁾。問題が再燃しないためにも、自分は資料整理者となり、彼ら（故人の弟と息子）に著者となってもらい、まず大臣の伝記を出そうと決めた。その過程で、議論し、想定される葛藤を経て、何とか妥協点を生み出すことができると信じている。

VII.

次の年（2002年）、カタクウィが反政府軍LRAに

一時的に占拠された。反政府軍は、(昔のポル・ポトのような)オカルト的な信仰を背景にしており、私の知己数名を含む推計約300人を殺害していった。それは数ヵ月後に国軍によって制圧されたが、私の親友の妻は子供を残し、国軍の兵により連れ去られてしまった。私は、ここではフィールドワークを離れて、義援金と食料を持って一日だけカタクウィに出かけた。村は荒廃し、あちこちに弾のあとがあった。その次の年も、その次も、調査の合間を縫って、わずかなお金と食料をカタクウィに運んでいった。たぶん、自己満足にしかならないと思うけれど。

グワラグワラには、息子がいる。私より年上で、(2011年現在60歳)いわゆる擬制的オヤコ関係というものである。彼は私が現れると、子供のようにおねだりをする。だいたい私にとって孫になる彼の娘たちの学費である。2010年12月、彼は長年連れ添った妻と正式な結婚式を教会で挙げた。花嫁代償をすべて支払い、式の資金を貯めるのに時間がかかるので村の正式な結婚式は中年以降になってようやく挙げることができる。もちろん、式の資金の何パーセントかは、私からねだったお金を貯めたものであることはいうまでもない。

やや冗長になったが、私のフィールドとのおつきあいは、いまのところ以上のように語りうるように思われる。私はこの夏も一年ぶん年をとった彼らに会いに行く。今回も死んだ大臣の残した3本の16ミリフィルムをデジタル化して遺族に渡すことになっている。

まとめにもならないけれど、最後に一言要約するとすれば、地域の人びとの生活の内奥まで踏み込もうと思ったなら、少なくとも原理的には必ず何がしかの葛藤が起きるということと(起こらなかったら何かラッキーな要素があったからで、普通は覚悟しないとイケない)、それでもなお、投げ出さずに真摯にそれと向き合うことで、それよりよりよい、より強い関係が構築されるのだ、という経験則である。そして、どういうわけか、行動の方向性さえ決まっていれば人脈などの葛藤解決に向けて不可欠な要素は、不思議とつながってくるものなのである。

付記： 本稿は2005年7月13日に行われた地域構想学談話会における報告「私とフィールドとのおつき

あい—自己紹介に代えて—」をもとにしたものである。この中では地域構想学科在職中に実習などで出会った方々とおつきあいには紙幅の関係で言及できなかった。梅屋(2010b)で多少言及しているので興味のある方は参照願いたい。

参考文献

- 梅屋潔, 1994a, 「『化かされる』という経験(こと) —あるいは人類学的実践についての覚書き—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第38号, 81-92頁
- , 1994b, 「邪な祈り—新潟県佐渡島における呪詛—」『民族学研究』第59巻1号, 54-65頁
- , 1994c, 「配役なき脚本—和歌山県古座町『河内祭』調査中間報告—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第39号, 45-55頁
- , 1995a, 「新潟県佐渡島における呪詛—黒森・白田地区の事例から—」慶應義塾大学社会学研究科平成7年度修士論文, 慶應義塾大学
- , 1995b, 「『象徴』概念は『合理』的に埋葬されるか?—新潟県佐渡郡の狛信仰から—」『民族学研究』第59巻4号, 342-365頁
- , 1995c, 「有り難きひとびと—新潟県佐渡アマガタヤの生活史—」木曜会責任編集, 櫻井徳太郎監修『シャーマニズムの世界』東京堂出版, 87-102頁
- , 1998a, 「人が死ぬわけ《死んだものとのつきあい方—ウガンダ・ジョパドラの場合—(上)》」『Sogi(葬儀)』44号, 73-76頁, 表現社
- , 1998b, 「葬式の意味《死んだものとのつきあい方—ウガンダ・ジョパドラの場合—(下)》」『Sogi(葬儀)』45号, 73-76頁, 表現社
- , 1999, 「起源伝承から『棍棒を携えた闘い』まで—ウガンダ・パドラにおける歴史と記憶—」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社, 413-431頁
- , 2002 「民族誌家と現地協力者—ウガンダ東部パドラにおけるクラツォララ神父とオフンビ親子の場合—」『哲学』第107集, 233-260頁
- , 2005, 「グローバル化と他者—今日のフィールドワークとは?—」奥野克己・花淵馨也編『文化人類学のレッスン—フィールドからの出発』学陽書房, 235-258頁
- , 2007a, 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・パドラにおける『問題飲酒』と妖術の民族誌—」『人間情

報学研究』第12巻, 17-40頁

- , 2007b, 「アチョワ事件簿—あるいは「テソ民族誌」異聞—」『アリーナ』第4号, 328-46頁
- , 2008, 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—jwogi, tipo, ayira, lamの観念を中心として—」『人間情報学研究』第13巻, 131-59頁
- , 2009, 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—現地語(Dhopadhola)資料対訳編—」『人間情報学研究』第14巻, 31-42頁
- , 2010a, 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・パドラ民族における酒と妖術の民族誌—」中野麻衣子・深田淳太郎編『人=間の人類学』はる書房15-34頁
- , 2010b, 「佐渡ムジナと私, そして追悼レヴィ=ストロース—「構造主義」からの落ちこぼれの証言—」『比較日本文化研究』第14号, 56-74頁
- , 近刊「ある遺品整理の顛末—ウガンダ東部トロロ県A・C・K・オボス=オフンビの場合—」『国立歴史民俗博物館研究報告』印刷中
- 梅屋潔・浦野茂・中西裕二, 2001, 『憑依と呪いのエスノグラフィー』岩田書院

Evans-Pritchard, E.E., 1937, *Witchcraft, Oracle and Magic among Azande*, Oxford: Clarendon Press

エヴァンズ=プリチャード, E.E., 2000, 『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術—』(向井元子訳) みすず書房

<注>

- 1) 神戸大学国際文化学研究科・准教授, 東北学院大学教養学部非常勤講師, 東北学院大学人間情報学研究科名誉研究員。
- 2) 1990-1996年には, 日本各地を祭礼中心にextensiveに見学した。記憶している限りにおいては, 下記のとおり。
越後浦佐「毘沙門堂裸押合大祭」, 愛知県東栄町月の「花祭り」, 豊橋市「安久美神戸神明社祭礼鬼祭り」, 長野県飯田市千代・野池区の「たいしょうこうじん」「事の神送り」, 長野県下諏訪町諏訪大社「お舟祭り」, 富士吉田市の小室浅間神社「流鏝馬神事」, 埼玉県本庄市普寛霊場の修験「春季大祭」, 和歌山県牟婁郡古座の「河内祭り」, 茨城県鹿島神宮例祭, 岩手県遠野市のオシラサマ, 千葉船橋市の「三山七年祭」などである。うち古座の方々とは現在も不定期的な交流

が続いている。

- 3) 当時は慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程在学中だった。
- 4) 1990-1995年および1999年に新潟県佐渡市で若干インテンシブな調査をおこなった。当初から想定していたわけではないが, その資料はそのまま修士論文の題材になった。
- 5) 梅屋 [1994a,b,1995a,b,c] および梅屋・浦野・中西 [2001]。
- 6) Evans-Pritchard [1937] (エヴァンズ=プリチャード [2000])。
- 7) 東アフリカ・ウガンダ共和国で行ったフィールドワークの調査資金は下記の通り。科学研究費補助金(特別研究員奨励費)(1996-1999, 2002-2005), 国際協力事業団(当時)長期派遣専門家(早期帰国)(1999-2000), 笹川科学研究助成金(2001-2002), 科学研究費補助金(若手(B))(2005-2008), トヨタ財団研究助成「水界に培われた生活知にかんする社会学的研究」(研究代表者田原範子)(2009), 科学研究費補助金(基盤研究(B))(研究代表者阿久津昌三信州大学教授)(2010-)。調査報告は末尾の文献表を参照。
- 8) このアルコール依存症の老教授は, この年の末に肝臓がんで亡くなった。
- 9) 私が初めて渡航したとき知られていた数値では国民の25パーセントがHIVキャリアであるといわれていた。
- 10) このあたりの経緯は, 梅屋 [2005,2007,2010a] に詳しい。葬儀屋さんの業界誌によせた原稿は梅屋 [1998a,b]。
- 11) それらの経緯については, 梅屋 [近刊] を参照されたい。